

第二回「絹織物 下」

埼玉産業歴史探訪

ぶぎん地域経済研究所 調査事業部 主任研究員 佐久間 康弘

「埼玉産業歴史探訪」シリーズの第1回として「絹織物」を取り上げ、前号では、地場産業としての埼玉県の養蚕、製糸業と秩父織物の起源と発展について掲載しましたが、今号では、埼玉県の伝統的手工芸品に指定されている「秩父銘仙」、「本庄織物」、「飯能大島紬」の歴史や特徴、最近の取組みなどについて触れてみたいと思います。

秩父銘仙

■歴史

前号でも触れましたが、秩父織物の起源は古く、古代には「知々夫絹^{ちちぶぎぬ}」と呼ばれた白絹の生産が行われ、朝廷にも献上されたと伝えられています。江戸時代、奥秩父の山々に囲まれた盆地の生活は、養蚕と絹織物が盛んに行われ、秩父を中心に小鹿野、横瀬など広範囲にわたり、大規模な機業地を形成していきました。

鎌倉に幕府が開かれる頃より生産も増え、その地風の堅牢さで鎌倉幕府の関東武士の旗指物として用いられていました。永禄年間(1560年頃)に南蛮渡来の布地を『シマ物』(遠い島から渡ってきた産物)と称し、茶の湯、武具などの飾り布に珍重され全国の機業地でその製織方法を競って研究していましたが、秩父でいち早く『シマ物』の製織に成功したのが、現在の秩父銘仙の始まりとされています。

江戸初期には、幕府の衣冠束帯の正服に

「根古屋絹」が採用され、その品質堅牢さを『鬼秩父』、『鬼太織』などと称され、武家の質実堅剛な気風にマッチしてその名を高めました。明治時代になると、秩父織物は、「ほぐし捺染^{なせん}」の技術の特許化し、現在の「秩父銘仙」が誕生しました。

秩父は、伊勢崎や足利等と並ぶ銘仙の5大産地の一つに数えられ、全国にその名を馳せました。秩父銘仙最盛期の昭和初期には、約500軒の機元が年間約240万反を織りだし、養蚕業を含めると約7割の住民が織物関連に携わっていたと言われ、まさに秩父の基幹産業でありました。

大胆で華やかなモダンデザイン柄の「秩父銘仙」は、大正から昭和初期の戦前にかけて、お洒落を楽しむ普段着の絹織物として全国的に人気を誇り、日本女性がファッションに目覚めるきっかけになったと言われています。

秩父銘仙の技術は、現在も受け継がれており、平成25年(2013)に国の伝統的工芸品に指定されています(県内では、江戸木目込人形、春日部桐箆笥、岩槻人形に次いで4番目)。

■特徴

秩父銘仙の前身となったのは、格子柄や縞模様が中心の「秩父太織^{ふとおり}」という織物です。その後太織は「秩父銘仙^{しま}」と名前を変え、「ほぐし捺染」技術の開発により、大胆で華やかなデザインの織物となりました。

「めいせん」は当初、名品のみを選んで製織したことにより、「名撰」と称し、秩父がめいせん発祥の地でありましたが、他産地でも同製品の製造がみられるようになったため、品質保証などの配慮から「秩父銘仙」と称して市場に出荷し、人気を博しました。

■ほぐし捺染^{なせん}

秩父地域出身の坂本宗太郎氏により、明治41年特許を取得しました。経糸に粗く緯糸を仮織し、そこに型染めをして製織する技法で、製織の際に仮織りした緯糸を、手で解しながら織っていくため、「ほぐし捺染」と呼ばれています。染められた糸を織るため、生地に裏表がなく、裏を使って仕立て直しできる利点があります。

■絹市と祭り

秩父銘仙と深い関わりを持つ祭りとして



ほぐし捺染 (ちちぶ銘仙館)

は、日本三大曳山祭りのひとつである“秩父夜祭”が挙げられます。江戸時代の秩父では、旧暦11月、秩父神社の周辺で大きな絹市が立ち、江戸や京都、大阪などから絹の買継商が集まりました。その買継商をもてなすために行われたのが、歌舞伎芝居や屋台、笠鉦の曳き回しであったのです。絹で財をなした秩父の民衆はその利益を惜しげもなく、屋台の装飾につぎ込むことで、日本三大曳山祭りと呼ばれる「秩父夜祭」が広く世に知られるようになりました。秩父夜祭は、別名「お蚕祭り」と呼ばれ、その年に採れた繭を奉納し、1年の繁栄を祈願する「蚕糸祭」が現在も執り行われています。



ちちぶ銘仙館

昭和5年(1930)に秩父絹織物同業組合(現・秩父銘仙協同組合)によって、繊維産業の向上と振興を図るために建築された。建築家フランク・ロイド・ライト氏が考案した大谷石積みの外装や昭和初期の特徴的な装飾を活かした建物として、平成13年(2001)に国の登録有形文化財に指定されている。

秩父織物、銘仙等に関する民俗学上貴重な資料を収集、展示し、併せて伝統的な技術を継承することを目的として設置された。秩父

銘仙が国の伝統的工芸品に指定されたことを受け、平成28年2月にリニューアルオープンされた。

展示資料室では、秩父銘仙の歴史や文化の解説、秩父銘仙ができるまでの工程を詳しく説明している。また、体験コーナーでは、実際に手織り、型染め、ほぐし捺染の体験ができる。

秩父銘仙の技術の伝承と後継者の育成を図るため、「秩父銘仙後継者育成教室」を開講しており、平成30年(2018)4月から6期生が技術習得に励んでいる。最近では、秩父市が舞台設定のモデルとなっているアニメをデザイン



した秩父銘仙の企画展示や「秩父銘仙」のレンタルサービスなど若者・女性向けの新たな取り組みも行っている。



秩父織物の主な系譜

715 年 (聖徳元年)	高麗人を武蔵国高麗川地方に移住させ、養蚕機織を普及
1192 年 (建久 2 年)	鎌倉幕府開く。秩父武士が秩父絹を旗指物に採用
1560 年 (永禄元年)	浅見伊賀守が産業奨励、根古屋絹を創出
1615 年 (慶長 20 年)	武家の衣冠束帯に根古屋絹が用いられた
1713 年 (正徳 3 年)	大宮郷に絹市が生まれる
1781 年 (天明元年)	年間 53,000 疋生産 (26,500 両)
1894 年 (明治 27 年)	秩父絹織物組合発足
1908 年 (明治 41 年)	坂本宗太郎 ほぐし捺染を特許
1923 年 (大正 12 年)	力織機導入
1930 年 (昭和 5 年)	埼玉県秩父工業試験場設置
1937 年 (昭和 12 年)	秩父織物 2000 年祭施行
1943 年 (昭和 18 年)	企業整備行われる。工場数 371 織機 8,093 台から工場数 164 織機 2,790 台となる
1950 年 (昭和 25 年)	秩父織物協同組合
1978 年 (昭和 53 年)	年間生産額 220 億円
1985 年 (昭和 60 年)	秩父地域地場産業振興センター竣工
2002 年 (平成 14 年)	ちちぶ銘仙館オープン

出所：ちちぶ銘仙館資料より



本庄織物 (埼玉伝統工芸会館)

で、農家の娘が家の養蚕の繭から自家製糸を行い、普段着として着用されていました。利根川を越えた伊勢崎織物と一緒に発展し、その製品は、伊勢崎銘仙として全国に知れ渡りました。

日本初の私鉄、現JR高崎線は、繭・絹を運ぶ鉄道で、その沿線には、信州からの大規模製糸工場が進出し、製糸のまちとして発展しました。

戦前の最盛期には、市内に70余の機屋があり、伊勢崎銘仙の過半数を生産していたことから「本庄の織娘が伊勢崎銘仙を織る」などと言われたとされています。

ほんじょうおりもの ほんじょうかすり 本庄織物 (本庄紼)

■歴史

本庄地方の絹織物の歴史は、利根川対岸の群馬県伊勢崎地方の賃織りとして、県北一帯の養蚕をもとにした太織に始まるとされています。農家の副業として生産されだしたもの



東北本線・高崎線の 大宮分岐

日本で初めての私鉄鉄道である日本鉄道会社は、明治16年(1883)に上野・熊谷間を開業し、それから約1年かけて高崎・前橋まで延伸しました(第1区線)。これにより、上毛地方の蚕糸業地帯から輸出港のある横浜まで鉄道によって輸出するルートが完成しました。第1区線は、当時日本の重要な輸出品であった生糸を海外に送るためのシルクロード(絹の道)と

しての機能を果たしました。

日本鉄道は、続いて白河へ向かう第2区線を建設することになりましたが、ここで、どこから分岐するかが問題となりました。その当時、商工業発展のために、白井助七ら大宮の地元有力者達は、さかんに大宮駅誘致運動を展開しました。これに対し、製糸業の発達した足利の機業は、熊谷を分岐して伊勢崎、桐生、足利などの両毛機業地帯へ路線を誘致する運動を起こしました。当時鉄道局長であった井上勝は、大宮分岐案と熊谷分岐案を、建設費、工期などの面か

ら詳細に比較検討した結果、分岐点は熊谷に決定されました。



出所：鉄道博物館企画展資料より

埼玉県伝統的手工芸品

埼玉県で定めている伝統的手工芸品の指定要件としては、①伝統的技術または技法により製造されるものであること、②製造過程の主要部分が手工業的であること、③伝統的原材料が主たる原材料として用いられ、製造されるもの、④主として日常生活の用に供されるものであること、とされている。

埼玉県では、伝統的手工芸品産業

伝統的手工芸品 (絹織物)	主な生産地域
秩父銘仙	秩父市、秩父郡
本庄織物(本庄緋)	本庄市
飯能大島紬	飯能市、入間市

の継承と振興を図るため、技能後継者の育成や技術の継承、需要の開拓などに取り組んでいる。

埼玉県伝統工芸モデル工場整備促進事業

埼玉県伝統工芸モデル工場整備促進事業は、埼玉県の伝統的手工芸品の製作工程等を公開し、県民の理解促進と地域産業の振興に資することを目的に始められた事業で、県内では、平成 30 年(2018)5 月現在、13 産地 22 工場が伝統工芸モデル工場に指定されている。このうち、絹織物関係では、秩父銘仙、本庄緋の 2 産地、5 工場が指定されている。

埼玉伝統工芸会館

埼玉県知事指定の伝統的手工

芸品の 20 産地、30 品目すべてが常設展示されている。期間限定の企画展示や埼玉県伝統工芸士による実演や体験イベントが開催されているほか、物産館では伝統的手工芸品の販売も行われている。



■特徴

絹糸の風合いを生かした先染めによる製法で、真綿(絹の一種)を混ぜて織り上げるため独特な織味が特徴とされます。

手くくり^{いたじめかすり}緋・板締^{いたじめ}など、多様な技術により単純な緋柄から巧緻を極めた緋模様まで、幅広い製品が作られています。

はんのうおしまつむぎ
飯能大島紬

■歴史

飯能・入間地方は古くから絹織物の産地で、起源は和銅年間(708～715)にさかのぼるといわれています。特に裏絹は、高麗人の若光王により伝えられたといわれています。文献によりますと、「飯能が機業地として創始されたのは、…(中略)…元正天皇霊龜2年(716)高麗人を武蔵国に遷して高麗郡を置くとあり、その時、ここに移された高麗若光王が韓の織法をもって織物を普及し後世に伝え(後略)」と記載されており、当地は

古代から絹織物の産地でありました。

当時、高麗の織法で生絹を製織し高麗絹(こうらいきぬ)の名で知られたと伝えられ、江戸時代中期には、生絹が染色加工や練糸を用いた織法などに改良が加えられ、幕末には「飯能絹」として全国に広まっていきました。

■特徴

精巧な彫りによって製作された^{かすりいた}緋板を用いる独特な「^{いたじめ}板締^{ちゅうせんほう}注染法」と呼ばれる染色技術によって作られます。

飯能大島紬は、一本ずつ柄合わせしながら織り上げる精緻な柄と、厳選された良質の生糸のみを用いる製織により、独自の風合いと軽く、暖かく、着崩れしないという実用性と丈夫で飽きがこないため、3代に渡って着用できることが特徴とされています。



飯能大島紬(埼玉伝統工芸会館)